

# 上伊那国語教育研究会 80周年記念

ごあいさつ 令和5年度上伊那国語教育会会長 久保田雅樹

上伊那国語教育研究会は、昭和18年の戦時下、東京女子大学教授西尾実先生の指導を仰いで発足して以来、同好の士によって途絶えることなく今日まで続いてきています。

「自発的の研究会」の長き歴史を顧みると、諸先輩方への尊敬の念を禁じ得ません。

直近10年前から昨年度までをふりかえってみますと、大きな変化があった10年間であったように思います。西尾実先生、安良岡康作先生、中西一弘先生とご指導いただきましたが、平成30年度より新たに、山梨大学准教授の茅野政徳先生を講師にお迎えしました。コロナ禍の中、急速に進んだICT機器の活用も取り入れつつ、実践的な研究に拍車がかかっているように思います。しかしながら、本会がずっと大切にしてきた「教材研究から授業へ」の思いは変わることはありません。学習者が嬉々として言葉にこだわり、仲間とともに言葉を紡ぎ合う国語の授業をめざして、90周年そして100周年へと、あゆみを続けていきます。

ここまで本会を築いてこられた諸先輩方、講師の先生方、61名の本年度会員の皆様にあらためて感謝申し上げ、挨拶といたします。

## 令和4年度（2022年度）長野県国語教育研究協議会（上伊那大会）の様子



7月の日本国語教育学会長野地区研究集会を含めて、長野県国語教育研究会の事業として11月に上伊那大会を開催しました。参集とオンラインの複合となりましたが、子どもたちが言葉に向き合う姿を目指して重ねてきた研究の成果を県内各地の国語教育に携わる先生方に示すことができました。

記念行事① 講演会 14:45～15:45

令和5年6月7日（水）フラワーパレス

演題「物語を描くということ」 講師：児童文学作家 いとうみく 氏



神奈川県生まれ。『糸子の体重計』（童心社）でデビューし、日本児童文学者協会新人賞受賞。そのほか日本児童文芸家協会賞、野間児童文芸賞、ひろすけ童話賞、産経児童出版文化賞、河合隼雄物語賞、坪田譲治文学賞を受賞。著書に『かあちゃん取扱説明書』（童心社）、『二日月』（そうえん社）、『つくしちゃんとおねえちゃん』（福音館書店）、「車夫」シリーズ（小峰書店）、「おねえちゃんって」シリーズ（岩崎書店）、『あしたの幸福』（理論社）など多数。「季節風」同人。

記念行事② 懇親会 16:30～19:00

会員および先輩の先生方のご参加のもと、4年振りの懇親会です。

上伊那国語教育研究会通信

# 国語教室

第65巻1号  
通巻188号  
平成26年10月27日  
発行  
上伊那国語教育研究会  
印刷 聖光房

## 自分にとっての作品の意味

上伊那国語教育研究会会長 柴田 惇

県国語教育学会夏期研修会が無事終了し、ご参会の先生方にとって実り多い二日間となったことをうれしく思います。役員の方を中心にご準備をいただき、多くの会員の皆様にご参加いただきましたことに感謝申し上げます。

伴野会長先生からも、「上伊那の伝統、作品研究のよさを感じました」とのお言葉をいただいています。従来、一日目の作品研究では、主に構想（段落の切れ目）について意見交換をしていましたが、本年度は、研究係の先生方の提案により、主題を軸に構想について考えを出し合う話し合いになりました。「様々な考え方を聞くことが刺激になり、新たな読みの視点をいただいた」、「わくわくしました。こういう学びを大事にしたい」という参会者の感想から、夏期研修会が主体的な学びの場となったことが感じられます。また、「読みは一人一人のもの」、「心に残るところ、印象点を繰り返しかみしめ、自分にとっての作品の意味を求めていくのが作品研究」という田近先生のお話も、上伊那の立場と異なるところははないことが確認でき、有意義な時間となりました。

形にとらわれ、枠をはみ出すことを躊躇しがちな自分を反省し、学びたいこと、大切にしたいことを持ち、それに向かって真摯に問い続ける上伊那国語教育研究会のよさを感じました。来年の飯水大会にも多くの上伊那の先生方の参加が期待できそうです。「自分の研修を深めるのは自分」—そんなことを教わった二日間でした。

そんな折、ある高校の校長先生のお話をお聞きする機会がありました。「国語ができる生徒、文章を読める生徒に育てたい」と話される背景にあるのは、国語力の低下ばかりではなく、言葉による思考、人として当たり前の考え方ができない生徒が増えている現状を憂えていること。「国語ができる生徒は進んで物事を考え、主体的に疑問や課題を持てる生徒です。そんな生徒は、他の教科の力もある生徒」とのお言葉に、我が意を得たりという気がしました。

その後の国語授業参観では、校長先生の思いと裏腹に、生徒の課題意識があまり感じられず、受け身の姿勢であることが気になりました。これが平均的な高校生の姿なのだろうかと思う反面、「作品を読むのはおもしろい?」、「君たちの問いは何?」と聞いてみたくなりました。自分の高校時代がそうだったように、得点力の向上を目指す高校生たちが参考書や問題集で「問題を解く」楽しさを感じることはあっても、「読む楽しさ」を感じることは少ないのかもしれない。

「ある水準の授業を続け、学力レベルを維持していくことも必要」という校長先生の言葉に、高校の先生方の苦しさを思うと同時に、高校に進んでも、作品を読む喜びを感じ、自分にとっての意味を問い続ける子どもたちを育てていかねばと思いました。

文章に自分の意味を見出すことができる国語の授業、自分の問いを持ち主体的に追究する姿を目標に、子どもたちの、そしてわたしたちの読む行為をとおしての自己創造を目指す上伊那国語教育研究会でありますように。

今年も共に学んでいきましょう。



上伊那国語教育研究会通信

# 国語教室

第66巻1号

通巻190号

平成27年10月15日

発行

上伊那国語教育研究会

印刷 聖光房

## 国語の授業を「どのように学ぶか」

上伊那国語教育研究会会長 矢澤勝義

平成27年度がスタートして半分が過ぎようとしています。上伊那国語教育研究会の会員の先生方もそれぞれの学校でご活躍のことと思います。さて、現在、学校の内外で教育改革が盛んに叫ばれています。学習指導要領改訂、高大接続改革、コミュニケーションスクール、小中一貫等々、色々な改革が同時並行で進められています。みなさんの学校でも授業改善に全職員で取り組まれていると思います。なぜ、授業改善が必要なのかと言うことは、学力に対する考え方が変わってきたからだと言うことはご承知だと思います。これまでは、知識・技能を身につけたうえで、それを活用する力、すなわち思考力・判断力・表現力を身に付けることが求められていました。そして、これからは、さらに、主体的かつ協働的に課題を解決していく力が求められています。そこまでを学力と捉えることとなります。それは、一部の教科だけでなく全ての教科に求められます。もちろん国語科についてもです。

現在、授業改善のキーワードとしてアクティブラーニングという言葉が注目されています。「アクティブラーニングって何?」「何か新しいことを始めなければならぬの?」と思われるかも知れませんが、実は既に小中学校の先生方は取り入れています。今時、一時間中先生が講義を行いそれで終わりなんていう授業をする先生はいないと思いますので。アクティブラーニングの意義は、「何を教えるか」はもちろん大事なことですが、「どのように学ぶか」を実際の授業の中で身に付けていかせる

ことです。

子ども達が主体的かつ協働的に追究していく上で、やはり「課題設定」が最も大事だと考えます。「課題解決学習」は以前から言われていますが、その課題が子ども達の学びの意欲に結びついているか、今、もう一度考えて行く必要を感じています。先日、県国語教育学会夏季研修会飯水大会に参加させていただきました。その中で、田近洵一先生が、読み物教材の言語活動の行動目標についてお話をされました。それは、おおよそ次の四つに類型されるということでした。A型『読書紹介型(読書拡充型)』(お薦めの本を紹介する、推薦文を書く等) B型『情報発信型(情報活用型)』(リーフレットをつくる等、調べたことをレポートにまとめよう等) C型『言語表現型(自由表現型)』(物語を劇にしよう、紙芝居をつくろう等) D型『文学鑑賞型(作品追究型)』(人物の魅力について考える、物語の魅力について考える等)。私たちは課題設定に当たり、単元を貫く言語活動の目標や展開を意識し、教材の特性に応じた課題を意識していかなければならないと思います。

今年も、上伊那国語教育研究会夏季研修会が行われました。それぞれ忙しい中ですが、四十二名の先生方が参加をしました。また、先輩の野溝先生もレポートを用意して参加してくださいました。中西先生は講演の中で、昨年度の宮田中学校の『握手』の実践に関わり、学習の深化・拡充について具体的な姿でお話くださいました。国語の力とは「慣習化」↓「適用」↓「変型」↓「公表」を螺旋的に継続することにより独自の考えを確立していく事にあると話されました。昨年一年間、中学校部会の先生方が苦勞をされてきた研究の成果が認められ、とてもうれし瞬間でした。

これから上伊那国語教育研究会の秋季研修会、各部会毎の授業研究会が計画されています。会員の先生方にはよって、同じ、国語教育の研究を進めている先生方と共に研修を深める貴重な場になると思います。忙しい中ですがどれか一つには参加して自分の授業を振り返ったり、今後の授業の方向を考えたりする場になればよいと願います。



上伊那国語教育研究会通信

# 国語教室

第69巻1号  
通巻196号  
平成30年11月5日  
発行  
上伊那国語教育研究会  
印刷  
箕輪町(南)北条印刷

## 上伊那国語教育研究会の営みの中で

上伊那国語教育研究会会長 浦野 博

以前どこかでお話しした、三十年も前の思い出話を一つ。

上伊那に帰郡し、国語教育研究会(昔は国語同好会)にも所属して、一学期がスタートしたある日、同校の先輩からこんな誘いを受けた。「なあ、浦野君、今度、国語同好会の研究会と飲み会があるから一緒に参加してみないか。若い女性の先生も結構いるから。」全くもって不謹慎、今ならセクハラ発言でご用である。しかし言われるままにその会に参加してみると、そこに居並んでいたのは、湯澤正範先生、大槻武治先生、堀米好美先生、加藤達人先生などなど、昭和から平成初期の上伊那国語教育研究会を支えた重鎮も重鎮の大先輩ばかりであった(確か女性はい人もいなかった)。二校目勤務の駆け出しにはとてもついて行けそうもない国語教育についての議論が交わされるのを、犬が星を見るような面持ちで眺めていたのだろうか。懇親会では、諸先輩から、若いのによく来た、見所がある、と何度も何度もお酌され、身を小さくしていくら飲んで酔えなかつたように記憶している。以来、同好会の研究授業を何度もやらせていただいた。いや、やらされたという方が正しいのかもしれないが、でももしそんな経験がなかつたら、私はいつたいどんな教員になっていたのかと、ちよっぴり背筋が寒くなる思いである。本国語教育研究会に育てられたというのが偽らざる思いである。

さて、奇しくも今年の夏季研修会では、伊那北小学校西原先生から「上伊那国語教育研究会と西尾実『主題・構想・叙述』と題した講話があり、

西尾実先生と湯澤正範先生のお話を聞くことができた。西尾先生の「それからの自分の半生というの、私の言う『主題・構想・叙述』というの、はそういうのではない」と誤解を説いて廻る半生であった。」という述懐は、その当時でもどこに行つても「主題・構想・叙述」であった時勢を思うと、なるほどなあと妙に納得させられたし、湯澤先生が提唱していた「無課題の読み」も決して誤解してはならない地道な読みの営みであったなあと懐かしく思い出し、先人の営みに背筋の伸びる思いであった。

本研究会もご多分に漏れず、夏季研修会では長く「主題・構想・叙述」の研究協議を続けていた。東京学芸大学教授の安良岡康作先生を講師にお迎えして、教科書教材や安良岡先生が指定した作品を各支会や個人で作品研究し、持ち寄った「主題・構想・叙述」のレポートをたたき台にして徹底審議したものであった。安良岡先生は、時にはそんなのずいと思えるような構想(行空きの構想を無視する)を提示して会員をうならせたりして、それはそれで暑い夏恒例の充実したひとときであった。授業を構想する前の、文学作品を読む力を互いに磨き合うという真摯な営みであったと思う。安良岡先生退官後は、中心講師を中西一弘先生にお願いし、五十周年の「教材研究から授業へ」の研究冊子作りもあって、もう少し授業作りにシフトした研修会にしていくということ、現在のようになつたように記憶している。

以来、中西先生には三十余年の長きにわたつてご指導頂いた。常に児童生徒が「叙述を読む」とはどういうことかを念頭に置いての指導で、子どもたちの読みを中心に据えた授業のあり方を提唱し、また時にはご自身も授業学級に入つて授業をして下さつた。作品の魅力やその読み方、子どもたちの着眼点とらえどころの良いとを紐解いて下さる中西先生を、子どもたちも尊敬の念で見つめていたのではないだろうか。東中学校で伊勢物語「東下り」をご指導頂いた時の「さすがが大学教授は違うわ。」という男子生徒の感嘆の声も懐かしく思い起こされる。

その中西先生も、来年度が最後という運びとなつた。どのような形で最後のご指導をお願いするのがよいのか、どうやってもこれまでのご恩に報いることなどできないようにも思われるが、語り尽くせぬ感謝の気持ちを込めて、最終講演の場を用意していかねばならないと考えている。

上伊那国語教育研究会通信

# 国語教室

第70巻1号  
通巻198号  
令和元年11月5日  
発行  
上伊那国語教育研究会  
印刷  
箕輪町 祐北条印刷

## 振り返り、新たな一歩を

上伊那国語教育研究会会長 藤澤 義富

：(略)：私の授業や講演について、皆様多数の参加を得て私を助けてくださった資料、写真などが届き、まことにありがとうございます。身にあまる感謝状をはじめ、若い先生方の集合写真など、会長先生はじめ皆様の数々のご配慮を思い出し、何とお礼を申し上げてよいか、ひたすら深謝するばかりです。三十七年もの長い間、ありがとうございます。会員の皆様にもよろしくお伝えくださいませ。

奈良県大和郡山市小泉町 中西 一弘

令和元年度の総会は、元会長の堀米好美先生のご協力も得ながら、中西先生の最後のご指導をいただく機会といたしました。中西先生にしていたく授業の都合などで、会員の皆様に駒ヶ根までご足労いただき、大勢の参加で盛大に開催できましたことに深く御礼申し上げます。

堀米好美元会長先生からお葉書をいただきました。

『夏期研修会、出席出来ませんでした。きつと新たな師を迎え、充実した会になったのではないかと思います。児童生徒の心を育てる母国語教育です。時流に流されず、確かな国語力が身につく日々の授業の実践を心から祈念いたしております。』

令和元年は、時代の節目と共に上伊那国語教育研究会にとっても大きな節目の年となりました。

中西先生は、「研究者の設定した主題のために学習者がいるのではない。自分の意見があるかどうか。自分の考えがあるかだ。君はどう考えるかが大切。」「日本語が分かって初めて外国語がわかる。日本が分かる以上に外国が分かりつこない。」とおっしゃいました。

県の夏期研修会に参加しました。(以前と違って)大変楽しく勉強になると、一緒に参加した先生と大いに盛り上がりました。

富山哲也先生から、「今の学習指導要領に「主題」は入っていない。平成二〇年度版から消えている。主題を考えさせるなどは言わないが、正解主義になりすぎているか。一人称の作者から書かれた作品を客観的に考えさせたい。」というお話がありました。例えば、一年生の「少年の日の思い出」では、エーミールからみた世界だけでもいいが、三年生の「故郷」では、もっと客観的に考えさせたい。ルントウが香炉と燭台を所望したとき、心ひそかに笑った「私」はどうなのか。ルントウはどうして香炉と燭台を所望したのか、もしかしたら思い出の品がほしかったのかもしれないのでは……。語り合うことの楽しさを味わわせたい。こんな読みの広がり主流になってきました。学者が研究した主題を教える時代ではないとのことでした。

上伊那国研の夏期講習では、Cグループ「小中連携の古典」、Aグループ「お手紙」、坂本先生の「私の国語教室」、Bグループの「俳句」とお若い先生方が先頭に立って精力的に研究を進めてくださり、今後にとっても楽しみです。山梨大学の茅野政徳先生は具体的な分かりやすいアドバイスをくださいます。発表に使用したデータも置いていってくださいました。これからの国研の方向が見えたように思います。

中西先生は「私の最後の講演としたい」と結びながら、「もっと命があったらやりたい」とおっしゃいました。

同好の仲間と学び続ける上伊那国研でありたいと思います。

上伊那国語教育研究会通信

# 国語教室

第71巻1号  
通巻200号  
令和3年3月  
発行  
上伊那国語教育研究会  
印刷  
箕輪町 楠北条印刷

## 退屈でつまらない質問

上伊那国語教育研究会会長 藤澤康一郎

コロナ禍のためにさまざまな行事・活動を取りやめざるを得ない状況のなか、11月20日、茅野政徳先生（山梨大学）をお迎えして、秋季研修会を開催することができました。

例年のような、公開授業等はできませんでした。茅野先生による「演習」、「講演」（演題「資質・能力をはぐくむ授業づくり」と評価—子どもも教師も伸びゆく国語科—）を行い、充実した研修会となりました。

ご参加くださった先生方、運営に携わってくださった先生方に感謝申し上げます。

さて、国語教育研究会の先生方は、日々、国語教育に精進されている国語教師です。ところが、この国語教師というやつ、文学作品の中では、しばしばろくでもないものとして描かれます。

たとえば、寺山修司の、よく知られた、次の歌（「空には本」）。

煙草くさき国語教師が言うときに明日という語は最もかなし

若い人にとつて、「明日」とは、「希望」と同義語。ところが、煙草くさい、あの国語の先生が「明日」という語を口にする、まるで自分の「希望」までもくすんでしまうような気がする、というのです。「明日」が「希望」でなく、「絶望」のように感じられたのかも知れません。

佐藤哲也『シンドローム』の主人公は、高校生の男の子でして、自意識をこじらせ理屈っぽく（思春期の、少しばかり賢い男の子なら

ば、たいていそんなものではあるのですが）、あらゆるものを憎んでいます。彼は、口を極めて、国語教師を非難します。

国語の教師というのは生徒の前に愚劣なテキストを差し出して、愚劣な解釈を要求する愚劣な連中にほかならなかつた。愚劣な問いかけの中から少しでもまともな答えを出そうとすると、それはまともではないと言つて激しく否定し、一方、愚劣な問い掛けから愚劣な答えを引き出すと、それこそがまともな答えだと言つてほめるのだ。

国語の教師は愚劣なことしかしないし、愚劣なことしかほめないのだ、愚劣な国語の教師に指導された生徒は愚劣なテキストを愚劣に解釈する愚劣な人間になってしまう。（略）どれほど優秀な生徒でも、国語の教師の手にかかれば必ず愚劣な人間になるのだ、とぼくは思った。

国語の教師は国語を愚劣なものに変え、国語を破壊し、国語に触れるものは誰であろうと愚劣な人間に変えてしまふ。

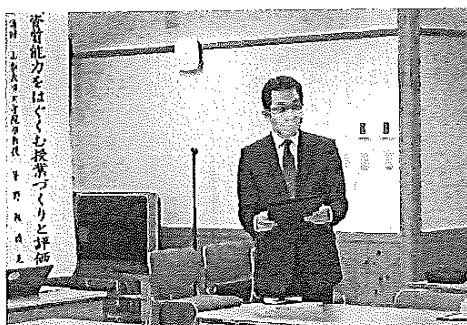
寺山にしても、佐藤さんにしても、長じて、文学で生きていくような子にとつては、国語授業での教師の問い掛けなどはすべて愚劣なものに感じられたのでしよう（天才寺山に国語を教えなければならぬ教師の悲劇）。ですが、それを差し引いてみても、男の子の非難には考えてみるべきことが含まれているように思います。

子供たちが授業で見せる反応は、教師からの働きかけに応じたものですから、その反応がはかばかしくなかつたとき（「愚劣」であったとき）、そこで検討されるべきは、教師からの働きかけ以外ではあり得ません。

村上春樹と川上未映子の対談集『みみずくは黄昏に飛びたつ』の「あとがき」に、村上は、ヘミングウェイがインタビュアーに答えて発したという言葉を書きつけています。「退屈でつまらない答えで申し訳ないけど、退屈でつまらない質問にはそういう答えしか返つてこないんだよ」。

国語授業に引きつけて書き直せば、退屈でつまらない発問（学習問題）には、子供からは、退屈でつまらない反応しか返つてこないのです。

各校の国語教育をリードしてくださっている国語教育研究会の先生方のご活躍に期待しております。



藤澤康一郎先生による公開授業の様子（11月20日）

上伊那国語教育研究会通信

# 国語教室

第72巻1号  
通巻201号  
令和3年11月  
発行

上伊那国語教育研究会  
印刷  
箕輪町(南北条印刷)

## 言葉にこだわり、言葉に向き合う

### 子どもたちを育てましょう

上伊那国語教育研究会会長 根橋 健治

コロナ禍のため今年度の教育活動も大きく制限され、行事だけでなく授業にも影響が出ているのではないかと思います。また、マスク着用や黙食が日常となり、人と人とのコミュニケーションにも弊害が生じているのではないかと危惧されます。

そんな中、上伊那国語教育研究会(以下、国研)は、できる活動ができる限り行おうということで、春の総会と夏季研修会を何とか実施しました。春はオンライン、夏は参集しての開催ということで形は違いましたが、茅野先生の講演は春も夏もお聞きすることができ、充実した時間を過ごすことができました。ここでは、その2回の茅野先生の講演を中心に、夏までの活動を振り返り、国研の目指すところを再確認できればと思います。

春は「言葉にこだわる、児童・生徒を指して言葉を知り、選び、生み出す国語教室」というタイトルで講演いただきました。印象に残ったことは、「特に小学校は、言葉をスポンジのように吸収できる貴重な時期である」ということ、そして、「私たち教師は、言葉を増やす妨げをしていないか」ということです。子どもたちの発言を教師が安易に言い換えたり、「○○さんと似ているね」で片づけたりといったことがないか、自分の実践を顧みる必要があります。また、国によって虹の色数が違うことに代表されるように「言語が世界を規定する」ということも再確認したいと思います。この世界をどうとらえるかは個人が規定します。言葉をたくさん知っていれば最適

な言葉を選ぶことが可能となり、様々な見方ができるようになります。そして、自分の思いや考えを的確に伝えることができます。言葉一つひとつに立ち止まって考え込む姿、「何て言えばいいんだろう」と悩む姿、そんな姿を国語教室で追い求めたいものです。

夏は、私たち会員の希望も取り入れていただき、「言葉に向き合う児童・生徒を指して漢字と説明的文章の学習を中心に」と題して講演いただきました。漢字については、「読み書き両方でできてほしい」「読めてほしい」漢字を峻別する必要性についてのお話がありました。また、協働的な学びで楽しく漢字力を高める具体的な実践も紹介していただきました。説明的文章については、こだわりの持つこと、そして、筆者に立ち向かう力強い読者を育てることの重要性を教えてくださいました。

2回の講演を通して、「言葉にこだわり、言葉と向き合う児童・生徒を育てる」ことの大切さを痛感しました。そのことが、子どもたちの生きる力、豊かに生きる力を育てるのです。まず、私たち教師が、言葉一つひとつに真摯に向き合い、自分のこだわりを大切に教材研究を行うことが求められます。その場がこの国研なのだと思います。

夏季研修会では、Aグループが言葉にこだわる授業に関わったの3つの演習を企画、Cグループが言葉そのもの(特に「やばい」)についての研究と実践の発表、そして、Bグループは秋の研究会に向けて説明的文章の授業構想を提案してくださいました。また、辰野西小の小野絵美先生による会員発表では、授業だけでなく生活全体で楽しく言葉に親しんでいく子どもの姿が心に残りました。どれも、茅野先生の講演が基盤になっており、春・夏・秋の国研の研究の流れが確かなものになっていることを頼もしく感じます。

コロナ禍の中ではありますが、秋の研究会での子どもたちの姿をもとに、「言葉にこだわり言葉と向き合う児童・生徒」を育てる国語教室づくりが全会員の力を結集していきましょう。

追記: 信教Booket vol.115 (2021.8) に茅野先生のワンポイントアドバイスが掲載されています。講演にも関連していますので是非、国語科(小学校は学校全体)で話題にしてください。私も本校の初任者と読み合いました。

## 80 周年に至る10年間の歩み

70周年以降も研修の場として、春の総会、夏と秋の研修会を重ねてきました。講師の先生が中西一弘先生から茅野政徳先生になり、研究グループも会員のニーズにより組織されて、現在は小・中の2グループになっています。次の10年に向けて、今後も“教材研究から授業へ”を胸にあゆみ続けていきます。

### 平成25年度（2013年度）【会長】塩澤 誠 先生

秋季研修会 東春近小学校にて授業公開（授業者：水上和明先生）  
部会内研究授業 赤穂小学校（高柳 愛先生）箕輪中学校（臼井智昭先生）

### 平成26年度（2014年度）【会長】柴田 惇 先生

夏季研修会 長野県国語教育学会の夏期研修会と兼ねて実施  
秋季研修会 宮田中学校にて授業公開（授業者：岡田泰輔先生）

### 平成27年度（2015年度）【会長】矢澤 勝義 先生

秋季研修会 伊那西小学校にて授業公開（授業者：清野里絵先生）  
部会内研究授業 春富中学校（八坂慎太郎先生）宮田小学校（長戸亜希子先生）

### 平成28年度（2016年度）【会長】唐澤 孝則 先生

秋季研修会 赤穂南小学校にて授業公開（授業者：佐々木浩先生）

### 平成29年度（2017年度）【会長】今井 良一 先生

研究部会をA小学校、B中学校、C新分野開発に編成  
秋季研修会 宮田中学校にて授業公開（授業者：三浦年男先生）

### 平成30年度（2018年度）【会長】浦野 博 先生

秋季研修会 南箕輪中学校にて授業公開（授業者：坂本香織先生）  
この年の秋季研修会より茅野政徳先生を講師としてお迎え

### 令和元年度（2019年度）【会長】藤澤 義富 先生

総会に合わせて中西一弘先生による短歌の授業と記念講演会  
秋季研修会 赤穂南小学校にて授業公開（授業者：寺沢愛未先生）

### 令和2年度（2020年度）【会長】藤澤康一郎 先生

新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて事業の縮小・中止  
秋季研修会 茅野政徳先生による演習および講演会 ※授業公開なし

### 令和3年度（2021年度）【会長】根橋 健治 先生

総会に合わせて春の研修会をオンラインで開催 茅野政徳先生による講演  
秋季研修会 駒ヶ根市立東中学校にて授業公開（授業者：仙波 歩先生）

### 令和4年度（2022年度）【会長】赤羽 隆 先生

日本国語教育学会長野地区研究集会 南箕輪小学校にて授業公開（授業者：龍野直人先生）  
第66回長野県国語教育研究協議会（上伊那大会）  
南箕輪小・中学校にて授業公開（授業者：小学校 龍野直人先生、中学校 坂野允昭先生）



赤穂中2年生と短歌の授業をする堀米好美先生と中西先生（2019年 春）